

海 の 老 兵 の 思 い 出^(※1)中第4回卒 木 幡 行^(※2)

(昭和50年6月の遺稿)

日清戦争の頃、私は7～8歳であった。ぜひ軍人になりたいと決心したものの、これには中学に入らなければならない。だがこの頃、木幡家は貧窮のどん底で、進学できる望みはなかった。そして馬陵城内の天神様に「学費は一切親に頼らない。教科書は筆写する。必ず特待生になる」ことを祈願した。

こうして、県立第四中学校（相馬中学の前身）に入学したときは真実に嬉しかった。入学の日から4年間、新聞配達をして月に1円30銭を貰い、教科書は筆写し、毎年特待生で卒業することができた。

この当時、相馬中学では生徒のストライキが流行していた。まず木村寔校長を放逐した。つぎに重野健造校長を監禁、辞職をせまり、県庁の役人がようやく救出するという状態だった。一時は相中が廃校になるという噂もあったほどで、私は生徒にあるまじき、このような行為を悲しみ憎んだ。

5年生になったとき、同級生が理科教室に集まり、「ストライキ絶滅」を決議、私を級長に選んだ。このため全校生徒を体育場に集合させ、厳かに「ストライキ絶滅」を宣言、全員の賛成を得た。その後10年間、相中にはストライキがなく平和な学校になったのは感激だった。

中学校生活は貧しさで苦しんだが、屈せず、撓まず万難を「滑稽」の2字で吹っとばし愉快に過ぎた。理髪も母の鋏を使い自分で刈った。学生帽も苦心しながらも自分で作った。貧乏でも旅行、登山が大好きでよく旅行した。小学校、お寺、知人の家、木賃宿などに宿泊し見聞を広めた。夏休み後の無銭旅行報告会では、先生も生徒も腹をかかえて笑いころげたものだった。

ところで、中学3年生からは洋服を着ることになり頭を痛めた。6月1日の衣更えの日、国語の授業で前田先生は教壇から霜降服の生徒を眺めた。そして黒板に「三伏の暑さの日にも霜降りの衣しきれば涼しかりけり」と書かれ、「ただ一人黒服の木幡はどうした」と呼ばれた。私は黒板に「三伏の暑さの日にも霜降りの衣しきれば寒さ身にしむ」と書いた。霜降りの服は買えず、ズボンは小倉のズボンを裏返ししたもので、白黒もわからぬ程だった。

明治39年8月、福原一郎^(※3)君らと一緒に海軍兵学校を受験した。学科試験を終えたあと、2人で日比谷公園に行き、入試問題をたしかめたが、出来が悪く2人共ダメだろうと思った。しかし、海軍兵学校の合格者が新聞に発表され、私は合格者180人中の110番ながら合格していた。その時の欣喜雀躍の思いはとても筆舌に尽くせるものではない。諸先生、恩人にたいする感謝の念でいっぱいだった。この年、相中からは福原、安藤^(※4)君なども海兵に合格、県内でも好成績だった。

江田島の海軍兵学校に入学、生まれて初めてのYシャツ、七ツボタンの軍服、そして短剣をつけて「我こそは帝国海軍士官の卵であるぞ」との感激と覚悟を新たにしていたのだ。

(※1) 「相中相高百年史」1998(平成10)年7月6日発行、「思い出の記」より。

(※2) 明治39(1906)年卒、中村出身。卒業生55名(第1学年時の在籍は148名)。

(※3) 栃木県出身。

(※4) 安藤清重。小高出身。